

お金ではなく、 人が支えてくれた

—何から始めたの？

20年前は、まだ一般家庭にパソコンなんてなかった。業務用コンピュータがやっとならなくて、ダウンサイジングし始めたところで、使える人は、専門の技術者や研究者だけ。でも、私がコンピュータを使わせてくれる人や教えてくれる先生を探してくるから、あなたたちは自分たちが言ったようにやりなさいと、「プロップ・ステーション」を立ち上げた。

企画したのは、一流の講師によるチャレンジ向けのコンピュータ研修。無謀だと言われたけど、ちょうど日本にIT業界が生まれようとしていた時期。若きベンチャーの志士たちは、「ナミねえの言うこ



チャレンジ就労支援 ICT セミナー (東京)

とはおもしろい。応援するよ」と言ってくれた。機材を借り受けたり、一流の技術者に講師になってもらえて、チャレンジたちは、一から必要なことを学ぶことができた。そして、彼らがプロになり、教える側になって次のチャレンジを育てていくという循環ができた。いま、プロップで講師をしている人、仕事をしている人は、9割以上がプロップでプロになったチャレンジだ。

人材が育ってきたところで、1998年に社会福祉法人の認可申請をした。草の根でやれるところまでやってみようと考えていたが、任意団体には仕事は出せないという。当時はまだNPO法はなくて、非営利の法人は社会福祉法人だけだったが、ほとんどは保育所や介護施設などの施設運営がベース。「施設を持たないグループが法人格を得るなんてあり得ない」と言われたが、理解してくれる人もいて、第2種社会福祉事業として認可された。

でも、補助金は1円ももらっていない。「国や自治体が決めたルールに則って運営する」ことが条件とされているからだ。私たちはルールを変えようと思っているのに、補助金をもらうためにルールに縛られたら本末転倒だ。だから補助金なしで、機材も事務所も、活動に共感してくれる人たちの支援や浄財で賄っている。チャレンジドからも、この活動を支えてもらうという意味で、ちゃんと講習費を取っている。

パソコン研修に参加したチャレンジドは、のべ4000人以上。3年ほど前から、パティシエ(菓子職人)研修も始めた。また、技術習得セミナーの開催と並行

して、企業や行政から仕事を受注し、在宅でそれが行えるようコーディネートすることに力を入れていて、入力業務やホームページ作成、イラスト制作で活躍している人が次々出てくる。「チャレンジドだから安く使われる」ことがないよう、価格交渉も大事な仕事になっている。

だからこの20年、お金ではなく、人が支えてくれた。人の力がどれほどすごいものを日々感じながら活動してきた。

—プロップ・ステーションという名前の由来は？

一緒に活動を始めた青年が付けた。彼はラグビー選手だったが、スポーツ事故で脊髄を損傷し、全身麻痺になってしまった。その彼のラグビーのポジションがプロップだった。最初はピンとこなかったが、調べてみたら「支えあう」という意味がある。

いままで支える人と支えられる人の間には、厳然と線引きがあった。でも、この線はいらない。すべての人のなかにある支える力を引き出して、みんなが支えあっている。そういう方向に視点を変えるステーションになろうという意味で、プロップ・ステーションと名付けた。

弱者を弱者でなくしていくプロセス

—視点を変える…。

日本の福祉は、「弱者」を決めて、手当するということだった。男女でいえば女性



が弱者で、年齢からいえば高齢者が弱者。そして障害者は、そういう弱者のなかでも、もっとも弱い存在。そんな弱者に対して、弱者ではない人が何かをしてあげるのが日本の福祉だった。でも、私は、その考え方を180度変えようと訴えてきた。福祉とは、弱者を弱者でなくしていくプロセスであるべきだ。支えられる側が1人でも多く支える側にまわって、経済や社会保障に貢献するような循環する仕組みを考えていくべきだと。

どんな働き方であれ、どんな人であれ、働く意思を持つ人は、社会にとって重要な存在だ。その人たちが弱者と位置づけて手